2025 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**発達障害児の保護者におけるニーズが早期支援開始に与える影響** －障害児通所支援施設を利用する乳幼児を対象として－
キーワード	①早期支援、②発達障害、③障害児通所支援

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	オカムラ　エリコ 岡村　恵里子
配付時の所属先・職位等 （令和７年４月１日現在）	東北文教大学　人間科学部　講師
現在の所属先・職位等	東北文教大学　人間科学部　講師
プロフィール	臨床発達心理士・公認心理師。障害児通所支援施設における療育指導員を経て、筑波大学大学院人間総合科学研究科障害科学専攻博士後期課程修了。博士（障害科学）。発達障害のある子どもの社会的認知の発達とその支援を専門とし、地域での観察・実験調査や巡回相談などに従事している。

1. 研究の概要

障害児通所支援施設に通所し、早期支援を受けた経験のある乳幼児の保護者を対象として、質問紙調査を実施した。そして、保護者の支援ニーズ及び支援に対する援助要請障壁の認識が、子どもの障害への気づきから実際の支援開始に至るまでの期間（待機期間）にどのような影響を与えるかを実証的に検討した。

2. 研究の動機、目的

発達障害の早期支援は、その重要性が広く認識されている。しかし、発達障害は早期の確定診断が困難であることから、最初に保護者が子どもの障害やその疑いに気づき、診断を受ける前に早期支援が開始されることが多い。一方で、保護者が子どもの障害やその疑いに気づいてからも、スムーズに早期支援に結びつかないことも課題となっている。早期支援を開始する前の保護者は、多くの支援ニーズを抱えていると想定されるが、実際にどのようなニーズに対して支援を求め、支援を利用する選択を行っているかについては十分に明らかになっていない。

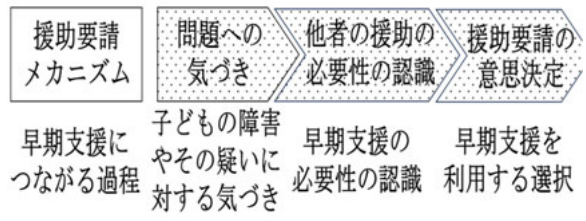


Fig.1 発達障害のある子どもの保護者に想定される援助要請メカニズム

成人に対するメンタルヘルス支援では、援助を求める側の援助要請に関する研究が行われている。援助要請とは、被援助者が他者に援助を求める現象をさす。援助要請が生起するメカニズムには、問題への気づきと他者の援助の必要性の認識、援助要請の意思決定という 3 つの段階が想定されている（永井、2020）。この援助要請メカニズムは、発達障害の診断または疑いのある子どもの保護者が、早期支援を選択するプロセスにも当てはまると考えられる（Fig.1）。

このような背景から、本研究は発達障害の診断または疑いのある乳幼児の保護者が、自身のどのようなニーズに対して援助要請を行うのか、またどのような援助要請障壁がその決定を阻害するのかを明らかにすることで、早期支援の利用選択に及ぼすプロセスの解明を目指した。

3. 研究の結果

以下に、岡村ら(2026)として学会発表した内容を報告する。

表1に示されるように、早期支援を利用する前の保護者の相談ニーズとしては、すでに支援を受けている保護者（Ueda et al.、2013）と同様に、対象児の発達や支援に関する情報を求めるニーズが相対的に高いことが示された。表2から、早期支援に対する援助要請を阻害する心理的障壁として、地域資源に関する情報不足や支援を受けることによる心理的・物理的負担への懸念のある者が多いことが示された。

表 1. 保護者の相談ニーズの中で「あてはまる」が多かった項目

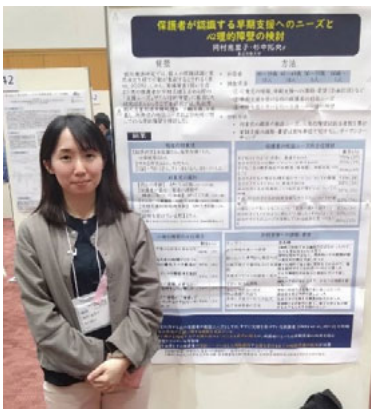
	割合(人)	
子どもはどのように成長し、発達するのか	**95%**	**(39)**
自分の子どもの行動にどのように対処するのか	**95%**	**(39)**
子どもに合う療育施設や幼稚園（保育園)、学校を見つけること	**95%**	**(39)**
自分の子どもが現在利用可能なサービスについての情報	**93%**	**(38)**
自分の子どもをどのように教育するのか	**88%**	**(36)**
自分の子どもが将来起こりうる状況や障がいについての情報	**88%**	**(36)**
今後、自分の子どもが利用可能なサービスについての情報	**83%**	**(34)**
心配なことや気になることについて家族の誰かと話すこと	**83%**	**(34)**
自分の子どもとどのように遊んだり、話したりすればよいか	**80%**	**(33)**
自分や子どものニーズを理解してくれる医師を見つけること	**80%**	**(33)**

表 2. 心理的障壁で「あてはまる」が多かった項目

	割合(人)	
支援をどこで受けられるか分からなかった	**66%**	**(27)**
支援を受けるための時間がとりづらい、または他の優先すべき事項があった	**59%**	**(24)**
支援を求めるという行動自体を負担に感じた	**59%**	**(24)**
対象児の状況や課題、必要なニーズを支援者に説明するのが難しかった	**54%**	**(22)**
対象児の状況や課題が、「障害」であると決めつけられるのではないかという恐れがあった	**54%**	**(22)**
支援を受けることで、対象児自身や家族に過度の負担をかけることへの不安があった	**51%**	**(21)**
支援を受けるための手続きが複雑だと感じた	**51%**	**(21)**

現在、追加データの収集を完了しており、さらに詳細な分析を進めている。

【引用文献】
岡村恵里子・杉中拓央(2026)早期支援利用前の保護者が抱える困難：相談ニーズと援助要請への心理的障壁に関する質問紙調査. 第 37 回日本発達心理学会.



4. 研究者としてのこれからの展望

本研究は、支援現場で実感した「早期支援を巡る保護者の思いや願いを明らかにし、不安や葛藤を軽減する支援の仕方を知りたい」という動機から始めた。本研究の調査を通じて、早期支援を受ける前の保護者の方々が感じている「我が子を理解し、より良い環境を整えたい」という切実な願いや、直面する様々な心理的障壁の一端を捉えることができた。

今後は、本研究で得られた知見を基に、保護者一人ひとりに対し、

誰がどのように寄り添い、「伴走」することができるのかという、より良い支援体制のあり方を探求していきたいと考えている。そして、障害の特性に関する基礎的研究と並行し、本研究のような実践的研究を進めることで、多様性の担保される社会の実現に少しでも寄与できるよう、真摯に取り組んでいく所存である。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

この度は、本研究に対し多大なるご支援を賜りました企業の皆様、ならびに日本私立学校振興・共済事業団の皆様に、心より御礼申し上げます。

本奨励金により広範な調査を実施することが可能となり、保護者の方々から貴重なご意見や思いを得ることができました。また、学会発表を通じて得たフィードバックは、研究者としての自信につながるとともに、より良い早期支援の実装に向けた伴走支援の重要性を再認識する機会となりました。

今後も、研究活動を通じて、いかなる立場の人も安心して子育てができ、生きやすい社会を目指すことに少しでも貢献できるよう、努力を重ねてまいります。改めまして、温かいご支援に深く感謝申し上げます。